

春陽会喜報

(木村莊八手書文書)

山本鼎先生の会へ復帰される方寸(胸中)については、前報の後、会員各位から左の返信が事務へ到着した。(順序不同) 紹介。

*

「山本鼎先生の御復帰双手を挙げて賛成お迎へ申したいと存じます。」

(川端弥之助)

「足立 只今旅行(北京)いたして居ります。先日山本様御来訪。いろいろお話しいたして居りました。あとで喜びしてゐたやうで御座いました。」

(足立源一郎内)

「山本鼎先生御復帰の件に付きまして、只今上野は旅行中でございますので、会報は早速旅行先へ転送致しました。云々」(上野春香内)

「ヤマトサンノコト サンセイ」(ペキン ウエノ)

「山本先生復帰の件 賛成」(横堀角次郎)

「山本鼎先生復帰の問題非常に喜ばしいことと存じます。是非さういふ運びになることを望むでをります。とり敢へず御返事迄」(南城一夫)

「山本さんの会への復帰は小生大変うれしく、さうあつてほしく思ひます。」

(栗田雄)

「山本さんの復帰は会のためにも喜ばしいことに思ひます。」(小穴隆一)

「山本鼎さんの復帰には大賛成です。」(小林徳三郎)

「省 会報拝見。山本さんの復帰の事賛成します。」(今関啓司)

「拝啓 山本先生復帰は吾等の希望する処。是非お迎へ下さい。但他の付属關係を充分御善処下さる様 山本先生のみ此際お迎へ致度いものと愚考開陳致します。」(倉田三郎)

「山本さんの御復帰の件、衷心よりの希望。是非実現させて下さい。」

(若山為三)

「拝啓 山本鼎先生の春陽会復帰問題の件、誠に有難く、会の道義、精神の上からも実に喜ばしいことと存じます。小生は会の一員として絶対に賛成の意を表します。尚その衝にあたられし、小杉先生、木村先生の労に對し敬意と謝意を表します。小生山本先生に接すること極めてわずかなりと雖も、同先生の生活、芸術に對して畏敬の念禁ぜざるものあれば、嬉しきこと限り無し。春陽会万歳。」(三雲祥之助)

「山本先生 春陽会復帰大賛成です。心からお迎へしたいと思ひます。」

(前田藤四郎)

「御地の皆さんの御労力感謝します。大阪展非常に好評で開催中であります。御安心下さい。山本鼎先生の会への復帰は大変結構です。心から喜んでお迎へしたく思ひます。」(伊藤慶之助)

「山本鼎氏の当会への復帰、双手を挙げて賛成します。」(石井鶴三)

「山本鼎先生の事大慶に存じます。」(加山四郎)

「拝復 関西へ行つておりましたので返事が遅れて申し訳ありません。山本先生を心からお迎へ申し度き一員であります。宜しく願ひます。」

（中谷 泰）

「山本先生のおかへりを衷心より慶祝に思ひます。」（岡鹿之助）

「前略 御書面拝見いたしました。國盛只今中支方面へ出かけ留守にいたしておりますので……云々」（國盛義篤内）

「山本氏御復帰のこと衷心賛意を表します。」（吉田達磨）

*

別に返信の無い分は、小杉、水谷、中川先生等々で返信に及ばない、それがこのことの肝煎り側だった。小杉先生の如きは夙に赤倉の山荘から五月十二日附、木村に私信で「……右公表なるべく早く御願ひいたしました」と配慮して居られる。

六月五日、前掲それらの會員の返信は一まとめに山本先生方へ送った。

『拝啓 先生会への御復帰のこと、別封書状の如く會員一同欣喜御迎へ申します。これを以つてすでに先生は御復帰ありしことと考へ度、この手紙をそのはじめとして差出させて頂きます。』

猶日ならず御拝眉申述べたく存じますが、いづれ先生御快気の折を見て、一同一會相計り度、又新聞雑誌方面、広く画壇への報告は会にて善処致します。

右御諒承賜はり度、書中拝礼（木村誌）

年 月 日

春陽会委員 印

山本鼎先生 東京都大森区山王一ノ二八一〇

この会信を出した。——が、内部の会報では、これに先立つてすでに諒承済となつてゐたことは前報された通りであつた。

山本さんから左の如く御返辭があつた。

『拝啓 初夏に際し御起居御快適と存じます。』

さて、一昨日は小生の春陽会復帰に関して公式の御挨拶を戴き、又今日はそれに対する會員諸君の快い御同意を記したはがき一と束をお送り下されうれしく存じました。

来春の会には小品なりとも、余生第一年を記念する出品を成し得度いと存じます。どうぞ皆さんに小生の此の挨拶をよろしく御披露下さいまし。

小生の病気はゆる／＼ながら快方、数日前此処へ湯治にまゐりました。上田市よりバスで三十分ばかりの山麓にあり、岩屋四軒といった小ぼけな温泉宿ですが居心地よろしく、宿の主人は吾等と同業の、油屋さんで若くして逞しい純情な青年画家。小生初見の人ですが、やがて春陽会の有力な常連となる人物です。

七月になつたら小生赤倉に放庵老をたづねることを楽しみにして居ります。御返事まで。

敬具

木村莊八様

山本 鼎

六月十二日 正午

会友諸君には予^{あらかじ}めこれについて御意見を求めなかつたが、会員進退に関する会議に依つて決するので御諒承得たい。やがて秋の美術季節を迎へやうとする前触れに際して、我々の会からこの春陽会風^{なご}な和やかなニュースを画壇におくることを等しく欣快とするものである。

今年の画壇は、決戦時期に当り、一時の此の秋と云はず——画壇全般にかけて、やがて変貌が起こるかも知れない。これについて差当り急議する必要があつたので、五月三十一日電報で在京会員を俄^{にわ}かに参集求めた小会があつたが、此の会の内容共々それ等が必要が起これば早速この次の会報に詳報する筈である。

昭和十八年六月三十日

会員 会友殿

春陽会

*昭和十年、第十三回春陽会展終了後の十二月、会員・山崎省三、

山本鼎。前川千帆（会友）退会。

*昭和十八年、山本鼎会員復帰。